

# 暗黙の性役割理論とジェンダー格差の関連

○華雪・清末有紀・森永康子  
(広島大学大学院人間社会科学研究所)

## 問題と目的

Kray et al. (2017) は、暗黙の性役割理論を用いて、なぜジェンダー格差が維持されるのかを説明しようとした。暗黙の性役割理論とは、実体理論（人の属性は固定的という信念）と増分理論（人の属性は変動的という信念）に関する研究をもとにしたもので、性役割をどの程度固定的か変動的かとみなす考え方である。そして、Kray et al. は、固定的 (vs. 変動的) な役割理論を持っている男性はジェンダー格差（ジェンダー・システム）を肯定する傾向を持つこと、その関係をジェンダー・アイデンティティの強さが媒介することを見出した。しかし、女性にはこうした関係が見られなかった。つまり、固定的な役割理論そのものは男性個人の地位の高さを保証するものではないため、男性個人が男性集団に所属するというジェンダー・アイデンティティを強めねばならないと考えられる。本研究では、Kray et al. をもとに、日本社会でも暗黙の性役割理論がジェンダー・システム正当化に関連し、男性ではその関連をジェンダー・アイデンティティが媒介する（女性では媒介しない）という仮説について相関的に検討する。

## 方法

**参加者** クラウドソーシングを用いて、400名の参加者を募集した。不備のあった者を除いて394名（女性200名、男性194名）を分析対象とした。平均年齢は40.7歳（ $SD = 10.08$ ）であった。

**質問紙の構成と質問項目** 質問紙の構成は以下の通りであった。なお、各尺度の項目はランダムに提示した。1. 暗黙的性役割理論尺度: 例「男性は、女性とは違う役割に向いていると思う」等10項目（Kray et al., 2017; 6件法;  $\alpha = .924$ ）。2. ジェンダー・システム正当化尺度（Jost & Kay, 2005）: 例「女性にとって、日本は住みやすい国だ」等8項目（Jost & Kay, 2005; 6件法;  $\alpha = .810$ ）。3. ジェンダー・アイデンティティ（Becker & Wagner, 2009 など）: 例「私は女性（男性）という集団の一員だ」等6項目（Becker & Wagner, 2009 等; 5件法;  $\alpha = .681$ ）。

表1 各尺度の平均値及びt検定の結果

	女性	男性	t値	p値	d
暗黙の性役割理論	3.71 (0.83)	3.71 (0.81)	-0.10	.920	-0.010
ジェンダー・システム正当化	3.03 (0.74)	3.40 (0.67)	5.05	<.001	0.509
ジェンダー・アイデンティティ	3.83 (0.72)	3.79 (0.67)	-0.48	.631	-0.049

カッコ内は標準偏差

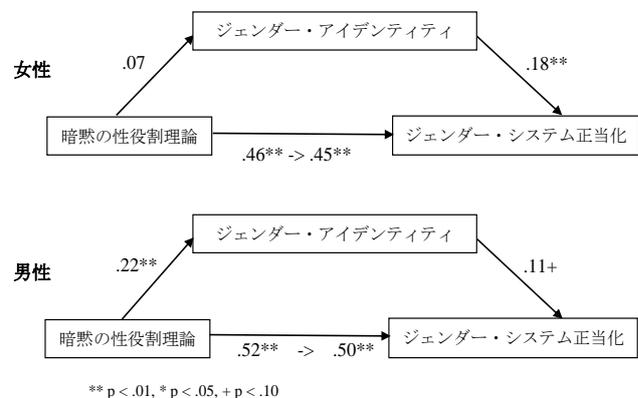


図1 女性・男性における媒介モデル

## 結果と考察

尺度得点のジェンダー差は、システム正当化のみにおいて見られ、男性の方が女性よりも正当化得点が高かった（表1）。また、男女ともに固定的な暗黙の性役割理論を持っている人ほど、ジェンダー・システムをより正当化しており、先行研究と一致する結果であった（図1参照）。

仮説に従い、ジェンダー・アイデンティティの媒介効果を検討するために、bootstrap法による検定を行った（図1）。女性では有意な間接効果が見られなかった（ $b = 0.011$ ,  $SE = .014$ ,  $Z = .798$ ,  $p = .425$ ）が、男性においても有意な間接効果は見られず（ $b = 0.019$ ,  $SE = .012$ ,  $Z = 1.538$ ,  $p = .124$ ）、仮説は支持されなかった。男性の場合、ジェンダー・アイデンティティと正当化の関連に影響する要因があるためではないかと考えられる。例えば、男女間の関係を競争的と捉えているゼロサム信念などが影響するのではないだろうか。今後は、こうした信念を考慮して検討する必要がある。

(科研費 21K02978)